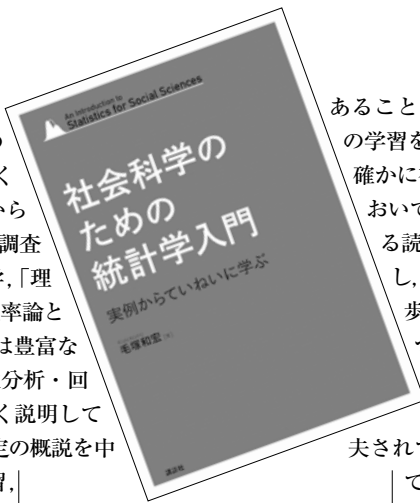


本書は、社会科学における応用を想定した初学者向けの統計学のテキストである。大きくは「コア」「理論」「手法」の3部から構成されており、「コア」では社会調査の基礎、記述統計学・推測統計学、「理論」では推測統計の基盤となる確率論と推定量の基準、そして「手法」では豊富な実例を踏まえて、クロス表・分散分析・回帰分析などの統計的手法を幅広く説明している。さらに終章では、ベイズ推定の概説を中心としてビッグデータや機械学習、計算社会科学などの最近のトピックにまで触れており、コンパクトなボリュームの中に密度の濃い内容が展開されている。

このように幅広い内容をカバーしている本書だが、読者として想定する初学者が広範な内容を興味をもって学習し、今後の統計的手法の利活用や更なる学習につながるように様々な創意工夫がなされている。その工夫の一つが、実際の社会現象に引き付けて説明を試みている点である。例えば「手法」の部分では、JGSSやISSP、SSMといった実際の社会調査データを用いて、下流社会（階層帰属意識）、世代間移動、家事分担などの多岐に亘る現実の事例に切り込みながら手法の説明が展開されている。こうした工夫は読者の興味・関心を引き付けるだけでなく、「統計的手法で何ができるのか」という分析道具としての具体的なイメージを想起させることにもつながり、知識から応用にまでスムーズに橋渡しする工夫であると評者は理解している。

また、初学者向けの統計学のテキストの中には、数式を極力排除して要点の理解を優先した構成のテキストも散見されるが、本書ではあえて数式を省かずに組み込んでいる。その理由を著者は、数学が統計学のコアになっていること、そして数学が発展的な統計的手法を理解するうえで不可欠で



## 社会科学のための 統計学入門

実例からいねいに学ぶ

毛塚和宏 著

講談社  
2022年  
A5判, 272頁  
2,800円+税

あることに鑑み、向後の更なる統計学の学習を妨げないためだとしている。確かに社会科学に属する学問領域においては、数式に忌避感を抱いている読者もいるかもしれない。しかし、本書では読者の理解を一步一步フォローするように丁寧かつ平易に説明する構成になっており、読者が無理なく自らの手で計算できるように工夫されている。向後の学習を見据えて

あえて数式を組み込み、数式への忌避感を少しでも和らげようとする試みは本書の特筆すべき二つ目の工夫である。

加えて、本書の三つ目の工夫として、統計学を分析道具として用いる際の心構えを説いている点も挙げておきたい。社会現象を分析する道具として統計的手法を理解する限りにおいては、妥当する分析の遂行、および結果の解釈には分析者の対象に対する深い理解が不可欠である。本書では、データ収集や結果の解釈に主観が介

在せざるを得ないことや、分析者のドメイン知識が無ければ成立しない「最弱」の学問であることなど、決して統計的手法が分析実施者／分析対象から独立した分析手法ではないことを繰り返し喚起している。これから統計学を学び、そして利活用を試みる学徒が決して忘れてはいけない心構えを喚起している点も本書の優れた点として評価できよう。

以上、広範な内容をコンパクトに収めつつも、単に統計学の知識を涵養するだけではなく、社会科学における統計的手法の利活用に向けたエッセンスを余すことなく収めた本書は、結果として出色の入門書に仕上がっている。学生だけではなく、調査・統計を用いる実務家など、幅広い読者に勧めたい良質の一冊である。